

書評

岩竹 美加子／編訳

『民俗学の政治性 — アメリカ
民俗学100年目の省察から —』

鈴木 寛之*

1990年代に入って以降、柳田民俗学、ひいては日本の民俗学一般を論じる論調の中に、民俗学という学問自体の有している、本書の表題でいうところの「政治性」を指摘する論調が目立つようになってきた。もちろんそれ以前においても、岩本由輝の一連の民俗学批判⁽¹⁾にみられるように、そうした指摘が皆無であったわけではないが、日本の民俗学界において近年特にこうした傾向が顕著になってきた端緒としては、船木裕『柳田国男外伝 — 白足袋の思想 —』（日本エディタースクール出版部、1991年）や村井紀『南島イデオロギーの発生 — 柳田国男と植民地主義 —』（福武書店、1992年）の刊行⁽²⁾といった契機が考えられる。

ここでとりあげる岩竹美加子編訳『民俗学の政治性』は、未来社の「ニュー・フォークロア双書」シリーズの第27冊目として、1996年8月に刊行された。同双書は、これから遡ること3ヶ月前に、岩田重則『ムラの若者・くにの若者 — 民俗と国民統合 —』を刊行してまだ程経ていない時点であった。同年3月に刊行された佐野賢治・谷口貢・中込睦子・古家信平編『現代民俗学入門』（吉川弘文館）も既に、書物の大きな節立ての中に「国家と民俗」の主題を含んでいた。民俗学界においては近年、国家の政策と民俗世界との関わりが明確に主題化されてきており、それは今や焦眉の急である、といった趣でもある。

その一方では、国文学や思想史といった領域からの「民俗学の政治性」を指摘する論調がある。村井前掲の著作（「増補・改訂」版は、

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

1995年に太田出版より刊行）をはじめ、櫻井進による『〈半島〉の精神誌 — 熊野・資本主義・ナショナリズム —』（新曜社、1995年）や、1996年7月に刊行された川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』（講談社）はその代表例であると言えよう。そもそも民俗学という学問自体が「近代」の所産であるといった指摘自体は、確かにこれまで刊行されてきた種々の概説書等々が、既にして繰り返して説くところではあった。しかし、そこに無意識に仕組まれていた「政治性」の内実について、正しく自覚的であろうとする姿勢と試みとが、謳われ実践されようとしてつづある、今はそういう状況なのである。

本書『民俗学の政治性』は、このような学界の動きのなかで刊行された。時期的には、まさに時宜にかなったものと言えよう。編訳にあられた岩竹美加子氏は、現在フィンランドに在住。1980年代後半から90年代初めにかけて、アメリカ・ペンシルヴァニア大学の大学院にて民俗学を学び、その在学中、当時からさまざまな形で議論的になっていた「民俗学の持つ政治的な意味」について、日本の読者に問い掛けたいというアイデアを得たのだという〔「あとがき」参照〕。

本書の構成は、以下のとおりである。

はじめに（岩竹美加子）

- 1 「ウィリアム・ウェルズ・ニューエルと19世紀後期アメリカにおける民俗の発見」
ロジャー・D・エイブラハムズ
- 2 「アメリカにおける文化の政治性とコミュニティ — 1888年から1988年を中心に —」
ジェーン・S・ベッカー
- 3 「本物の伝統、偽物の伝統」
リチャード・ハンドラー
ジョスリン・リネキン

- 4 「ヘルダー，民俗学，
ロマン主義的ナショナリズム」
ウィリアム・A・ウィルソン
- 5 「民俗学，イデオロギー，
近代ギリシアの創造」
マイケル・ハーツフェルド
- 6 「アメリカの民俗学研究と社会的変容
—パフォーマンスを中心とした
パースペクティブ—」
リチャード・パウマン
- 7 「誤りの二元論」
バーバラ・カーシェンブラット
ギンブレット

岩竹氏自身の説明によれば、本書は「民俗学と近代，民族，国家，国家意識の形成に民俗学と民俗学者の果たしてきた役割，民俗学の基盤にある矛盾した思想背景，民俗学とナショナリズム，ロマン主義といった，広い意味での民俗学の政治性」[14頁]に関して，アメリカの民俗学者（上記1・2・4・6・7），または文化人類学者（3・5）によって書かれた論考を集めたものである。論の初出は，4は1970年代に書かれたものだが，他は80年代の論文である。

本書冒頭に位置する岩竹氏の「はじめに」は，実に53頁に渡って，「民俗学の政治性」に関する議論の総体的な見取り図を示した親切かつ詳細な論考である。読者はこの「はじめに」の部分の概観しただけでも，民俗学の「政治性」という問題で何が議論の要諦となっているのか，概括した知識を得ることができる。以下では，この「はじめに」において話題とされている幾つかの事柄について，簡単に紹介してみたい。

アメリカにおいて民俗学の「政治性」が議

論の対象となった端緒には，人類学からの影響があった。80年代に人類学が盛んに提示した，「リフレクシヴィティ（客体としての自己の内省）」、「表象の危機」といった問題意識が民俗学にも共有されてきたのである。そこであらためて内省の対象となったのは，民俗学的思考が「近代以前，工業化以前の生活のあり方をロマン化し，ノスタルジックな態度をとってきた」点である。その点を反省し，次の段階では当然，民俗学者はどのようにして民俗学の対象や資料を構築してきたのか，その過程に着目し解析することこそが重要となる。

そもそも「民俗」や「伝統」という概念そのものが，「近代という経験を経て構築されたもの」であるとすれば，一見逆説的なようではあるが，「民俗学者は，民俗を過去からの残存物として収集，記録，分類する過程で，実は，我々が知覚するような形の「民俗」や「伝統」を構築してきた面がある」[12頁]とも言えるのである。

そうした認識の延長線上に，民俗学のもつ「政治性」が明らかになってくる。即ち，「近代国家を形成する際に，その国家らしさを過去との関係において創造する必要がある。それは，近代を伝統との関連で理解し，近代は伝統から発展したという物語を構築し，その二つの間に文化的継承を創造すること」[同前]なのである。民俗学の成立という事態を，こうした国際的な視野で見たときには，日本の場合も決してこの例外ではないのであって，単純に，柳田や折口，南方といった面々の個人的才量が，日本の民俗学成立の要件であったとするような論調は，厳しく問い直される必要があるとされるのである。

本書に収載されている個々の論文の概要に関しては，岩竹氏による「はじめに」が委細を尽くしており，また，各論文の執筆者の紹介記事も実に丁寧につくられているので，ここでは詳しくは触れない。評者がここで一つ

だけ指摘したいのは、前述のようにまさに「時宜に叶った」ものと言える本書の刊行が、日本の民俗学界に与えるインパクトの度合いに関してである。

本書の総論ともいえる岩竹氏の「はじめに」以下、個々の論文に目を通して見た時に、一読者として誰もが覚えるであろう感慨は、民俗学とは、成程こんなにもあからさまに「政治的」なものであったのか。「作為」が込められたものであったのかといった、新鮮かつ徹底した認識であろう。そこから痛烈な自己内省が生じてくる場合も当然であろうし、なにしろ「民俗学の危機」が唱えられて既に久しい昨今⁽³⁾、本書の内容を皮相の見で受け売りすれば、それこそ「民俗学」そのものを全否定してしまう言葉すらも、たやすく入手する事は可能であろう。

しかし、もちろん本書はそうした企図のもとに編まれたものではない。岩竹氏自身、本書の刊行意図に関して、まず第一に「民俗学的思考の足場にある矛盾や、そこに見え隠れする文化介入を批判するというよりも、そういった所に最も興味深い問題や民俗学にとってのチャレンジがあり、また、民俗学の今後の方向を考えるに適した課題が潜んでいることを示唆したい」のであり、第二に「いわゆるポストモダンの状況」において、どういったことが民俗学の新たな課題となるのか考える手がかりを探ってみたいのだとも述べている [14頁]。

しかし、全体的には本書の内容は、「民俗学の政治性」を追究し明らかにする事こそが主眼なのであって、「民俗学の今後の方向」に関しては、それほど明瞭な示唆を与えてくれるものではない。これは、或いは、ないものねだりの評言とされるかも知れないが、民俗学の「政治性」を追究してゆく中で「最も興味深い問題や民俗学にとってのチャレンジ」がみえてくるという編者の指摘は、それはまさにその通りなのであるが、より積極的かつ

具体的なビジョンの提示が伴わない限り、遺憾ながら、掛け声は掛け声に止まってしまうであろう予感の方が強い。

この点はむしろ、岩竹氏ならずとも苦慮する点ではあろう。氏自身、「民俗学の政治性」追究という課題自体がポストモダンの思想の産物なのであり、「ポストモダンの思想は、近代的知識や機構を結果的に再生し、強化する面もあり、私達は、近代的知の体系から逃れようとして、今の歴史段階ではその構造と枠組みの中で思考するという限界の中から抜け出せないようである」 [24頁] と説く箇所もある。

また次のような箇所もみられる。「民俗学者は、しばしばあるグループにとって何が民俗なのかを決定する権威を持ち、事実決定してきたのであり、そこで定義されたことがあるグループの中で内部化するというメカニズムがある。ある事柄を対象として客観化し、学問的視線にさらすという行為には常に力関係が付きまとう。民俗学者が、人々に共感し、共にありたいと願っても、この力関係を越えようとする事自体につきまとう矛盾をときほぐしてゆくことはできるのだろうか。」 [45頁] という慨嘆である。

ここで、最終的には疑問の形で突き出されてしまった問い掛けこそは、評者が、個人的に民俗学の「最も興味深い問題」や「学にとってのチャレンジ」として考えている部分の一つである。しかし、このような箇所の記述における編者のトーンダウンは、本書で言う「民俗学の政治性」追究と、こうした課題との間には、微妙な差異があることを感じさせる。

本書が提示する意味での、幾多の「興味深い問題」に関しては、日本の民俗学界においても、これから実証的な研究成果が急速に蓄積されてゆくであろう。しかし、その蓄積の果てに、「政治的」な産物としての「日本民俗学」を相対化する視線が完全に出揃ったとしても、それですぐに「民俗学の危機」が克服

できて、あかるい展望がひらけたことには決してならない筈である。これは、両輪の課題として今後の民俗学が抱えてゆくべきものである。

さて、ここまでの評言の対象が、岩竹氏による「はじめに」の部分に集中してしまった憾みがあるが、本書収載の個別の論考の中には、そうした「民俗学の危機」自体に関しても、克服のための多々の示唆を与えてくれる指摘が少なくはないのである。上記6論文におけるパフォーマンス理論の導入や、7論文における、従来、アカデミックな「民俗学」と大衆的な「応用民俗学」とを二元論的にとらえてきたアプローチに対する批判。また、2論文における、19世紀アメリカにおいて、都市に住む白人によって「インディアンのより素朴な生産形式や生活形態を周縁化すると共に理想化」されていったプロセス、また、20世紀に入ってからアングロ・サクソンの山民が「発見」されてきたプロセスの描写等も示唆深い。ただし、岩竹氏も述べているように、本書における個々の論者の間での、政治性やナショナリズムといった課題に対する考え方は、当然各々の見解が完全に一致しているわけではない。それをじゅうぶん斟酌しても、『民俗学の政治性』という総題のもとに一冊の書物が編まれ、それが日本で刊行された意義は大きいのである。

本書の内容をざっと概観しただけでも、90年代に入って日本で、先に掲げたような書物

が次々に刊行され始めた経緯がわかるし、日本という一国の中に閉塞しない規模で人類学・民俗学の思潮を捉える事が出来る。何よりも本書で開陳された内容は、民俗学自体の「問い直し」に当たっては、これ以上の決定打はないと思える程に核心に迫った内容である。その意味で本書は、民俗学に関わる全ての人々が真に「対峙」すべき書物であると言えよう。本書を構想し、編訳にあたられた岩竹美加子氏の労に報いられるだけの「回答」は既に、本書の一読者としての、自身の課題でもあるのである。

(未来社 1996年8月刊)

註

- (1) 後に同著『柳田民俗学と天皇制』（吉川弘文館、1992年）等に集成される。その後も「植民地政策と柳田国男 — 朝鮮・台湾」（『国文学』38-8、1993年）他の論考がある。
- (2) 船木、村井の著作に関しては、本誌『比較民俗研究』第6号（1992年9月）において、島村恭則による書評〔同誌185-188頁〕が掲載されている。
- (3) 近年「民俗学の危機」を議論の前提とした趣で組まれる雑誌の特集記事を目にする機会が多い。山折哲雄「落日の中の日本民俗学」『フォークロア』7、1995年、本阿弥書店、等の論考を参照の事。